

姫路

／ 現代によみがえる！ ／

大名行列 衣装・行列道具 コレクション

姫路
お城まつりにて、
大名行列を
再現！



そもそも、大名行列ってナニ？

ただ移動するだけのものではない！ 知れば知るほど面白い大名行列の世界へ、いざ出陣。



実は、大名の家柄の高さを見せていた、**江戸時代**の大名行列。
まさに、大名の威信をかけた戦いがそこにありました。

参勤交代をはじめ、江戸城への登城や参詣、市中への外出など、大名が出かける際には行列を組んで練り歩いていました。そこには単に殿様(藩主)を警護するだけが目的ではなく、家柄や藩の権威といった力や富を誇示する重要な意味合いがあります。行列の人数、槍や長刀などの道具、また行列の中の配置位置など、徳川幕府によりこと細かく決められており、殿様は大名行列を通じて自分がどの地位にあるのかを確認し、また周囲の大名に示す一大行事だったともいえます。実は、その行列の大多数は日雇いアルバイトである武家奉公人だったというのも興味深いことの一つ。

特に大きな戦のなかった時代、大名たちは行列を通じて優位性を争っていたことがうかがえます。まさに、華やかな世界に潜む、大名たちの静かなる戦い。その隊列や衣装、道具などに込められた意味を読み取りながら見ると、歴史の面白さや奥深さに気づくはず。いざ、大名行列の世界へと足を踏み入れてみましょう。

姫路市では、姫路市所蔵の大名行列絵図を参考にして、当時の衣装や道具、持ち物など、900点余りを復元。姫路お城まつりにて、姫路版大名行列を再現します！

詳しくは、コチラをご覧ください。



「頭徳院様將軍御名代上京行列図」(姫路市所蔵)



大名行列はどんな人たちで組まれる？

そもそも大名行列とは軍隊の行進・移動のこと。それぞれの役割を持った隊列から構成され、その中には家臣を囲む行列がいくつもありました。

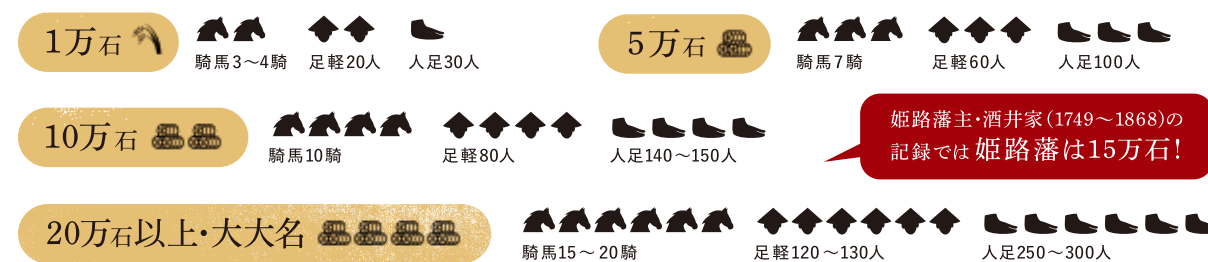
大名行列の基本構成



大名は自由に行列を組むことができない！

例えば、藩の石高数(収穫できる米穀の量)によって、大名行列の人数や隊列、持ち物などが徳川幕府により決められていました。

石高数における大名行列の人数



姫路藩主・酒井家(1749~1868)の記録では姫路藩は15万石！

徳川御三家 徳川將軍家に次ぐ地位を誇った3家 尾張徳川家・紀州徳川家・水戸徳川家

1833年の紀州徳川家の参勤交代では、総勢3,234人(家臣134人・人足1200人程度)が練り歩いたとも！

江戸時代、全国各地には260~280家ほどの大名がいました。大名は通常、1万石以上の領地を持ち、徳川幕府の定めに従わない限り、自由に領地を納めることができ、その領地のことを藩といいます。主に、20万石以上の領地を持つ者を大大名、5万石以下の領地を持つ者を小大名といい、年代によって数は異なりますが、大大名は20家ほどで、小大名は160家以上と大半を占めていました。

江戸から京都まで、約500キロの大移動！ 姫路藩主・酒井家の大名行列にお供したさまざまな役職や隊列たち。

掲載しているのは、江戸時代後期の大名行列絵図「顕徳院様將軍御名代上京行列図」で、1859年(安政6年)に姫路藩主・酒井忠顕(ただてる)が第14代將軍として、江戸から京都まで、約500キロの大移動を行いました。その白羽の矢が立ったと思われます。その後、名誉あることとして絵図に残されたのでしょう。さらに記録によると、大名行列に加わった人数は1,200

人以上とも。姫路藩主・酒井家の家柄とともに、姫路藩の大名行列を知るうえでとても重要な意味を物語っています。

大名行列絵図「顕徳院様將軍御名代上京行列図」(姫路市所蔵)

3 槍 隊

Yaritai

槍を備える前衛部隊の一つ。槍は武家を象徴する道具であり、家の格などによって色や鞘の形などが徳川幕府より決められていました。

金紋を付けられたのは限られた家柄のみ！

2 弓 隊

Yumitai

弓を備える前衛部隊の一つ。大名行列では装いを整え、弓と矢と一緒に仕舞える弓立に入れて運びました。

1 先 払

Sakibarai

大名行列の先頭で警戒し、交通の障害や危険を取り除く役割。また、殿様(藩主)が通ることを周囲に知らせることも行いました。

朱塗りの格子が目立つ特別な入れ物！

5 本 陣

Honjin

駕籠に乗った殿様(藩主)を中心に、周りには殿様を守る中小姓と呼ばれる武士や殿様の身の回りの世話をする者、側近たちなどがいました。

4 鉄 砲 隊

Teppoutai

鉄砲足軽で構成される前衛部隊の一つ。大名行列では青みを帯びた深紅色の毛織物に入れ、肩に担いで運びました。

6 輜 重 隊

Shicyoutai

大名行列に必要な大量の物資を運ぶ輸送部隊。長持や挟箱などと呼ばれる容器に収納し、担ぎ手あるいは駄馬に乗せて運びました。

大名行列のメイン所！駕籠の中に殿様(藩主)がいました！

鞍の上に虎皮があるのは特別な家柄の証！

平成31年度文化庁補助事業「Living History(生きた歴史体感プログラム)促進事業」のもと、江戸時代後期の大名行列絵図「顕徳院様將軍御名代上京行列図」(姫路市所蔵)を参考に、衣装や道具、持ち物など、900点余りを復元しました。今後、姫路城にて「播州姫路酒井雅楽頭御行列」(西尾市岩瀬文庫所蔵)などを参考に、姫路版大名行列を再現します。姫路市に伝わる歴史や文化財などの魅力に触れる、体感コンテンツを発信していきます。



「Living History(生きた歴史体感プログラム)促進事業」とは、国指定・選定文化財を核として、文化財の付加価値を高め、収益の増加等の好循環を創出するための取組を支援する文化庁の事業です。

1 先 払

Sakibarai

大名行列の先頭で警戒し、交通の障害や危険を取り除き、また人払いなどを行う前衛部隊。大名行列でよく耳にする「下に〜、下に」という掛け声は徳川御三家のみに許された特権でした。



御先払足軽

Osakibaraiashigaru



人払いといった通行の露払を行う足軽。大名行列の通行を往来の人々に知らせ、トラブルを未然に防ぎ、また道案内なども行いました。

鷹匠

Takajyou



鷹をいただいた際、その鷹を大切に預かる者。また、道中で殿様(藩主)が鷹狩をする際に従事しました。姫路藩主は江戸から帰る際、徳川将軍から鷹をいただきました。

対挟箱

Tsuibasambako



衣類や具足、文書などを挟箱という容器に入れて運びました。対挟箱とは片掛けの挟箱を1対としたもので、棒の先に紫の太い組紐の化粧紐を結びました。

御用物長持

Goyounonagamochi



長持とは長方形の大きな箱のことで、殿様(藩主)の甲冑や刀、旗などの大切な物品が収納されていました。酒井家では朱塗りの武具運杵と金の家紋が描かれていました。

旗竿

Halazao



のぼり旗を掲げるための竿を運ぶ者。戦国時代では、家紋の描かれたのぼりを見て、敵味方を見分け、また士気を上げる役割がありました。

2 弓 隊

Yumitai

弓を備える前衛部隊で、大名行列では装いを整え、弓と矢と一緒に仕舞える弓立に入れて運びました。鉄砲は普及していましたが、弓は戦場で最も相手にダメージを与える武器でした。



足軽小頭

Ashigarakogashira



弓隊で弓や矢を運ぶ足軽たちを統率する者。小集団をまとめる長のことを小頭といいます。

弓立

Yudachi



弓2本と矢籠、弦巻と一緒にしたものを弓立または弓台と言い、それを担ぐ者。主に殿様(藩主)の持弓を運びました。

矢箱

Yabako



矢を数多く納められる矢箱を担ぐ者。弓足軽は、この箱から矢の供給を受けて弓を撃ちました。

空穂

Utsubo



空穂とは矢を収納し弓兵が腰に背負うものですが、大名行列では装飾品として用いられました。全体に金箔を貼り、酒井家の家紋が大きく描かれています。

道中ひと休み瓦版
酒井家の
お宿ドタキャン騒動。

其の1

1823年(文政6年)、徳川将軍の名目で江戸から京都へと大名行列で上京した際、宿で、数日前までに予約を入れるものでした。そのため、本陣では食事のため直前に予定が変更になったようで、1人1合として約150人分の米がムダになり帳面に記されていました。

道中の三河・二川宿 本陣(現・愛知県豊橋市)で小休憩を行う予定でした。本陣とは大名や公家などが利用できるに2斗5升(約38キロ)もの米を炊いて待っていましたが、酒井家の大名行列は一向に現れません。どうやら。その後、キャンセル料は払ってもらえたのかはわかりませんが、酒井家のドタキャン騒動はしっかりと



3 槍 隊 Yaritai

槍を備える前衛部隊で、槍は武家を象徴する道具でした。家の格などによって色や鞘の形などが徳川幕府より決められており、槍を見ればどの家の大名行列なのかがわかりました。

御徒士 Okachi



槍を備える下級武士。足軽とは異なり、武士身分を持った者が務め、公的に苗字を名乗り、帯刀することも許されていました。

金御紋付対挟箱 Kingomontsukitsuihasambako



殿様（藩主）や藩士の着替えなどを入れた挟箱を担ぐ者。挟箱は家の格と威厳を示すもので、金御紋をあしらうのにも許可が必要でした。

御持槍 Omotaseyari



武家のシンボルである槍を備える者。家ごとに刃先の鞘の形や柄に特徴があり、酒井家は朱塗柄を2本使用することが許された数少ない家柄でした。

長刀 Naginata



武家のシンボルである長刀を備える者。大名行列では刃先を見せず、革製の覆いで隠していました。三日月形の覆いは酒井家であることを示しました。



4 鉄砲隊 Teppoutai

鉄砲足軽で構成される前衛部隊で、大名行列では青みを帯びた深紅色の毛織物に入れ、肩に担いで運びました。鉄砲は重要な武器であり、江戸へ持ち入れる際、鉄砲手形が必要でした。

御徒士小頭 Okachikogashira



下級武士である徒士たちを統率する者。小集団をまとめる長のことを小頭といいます。

御手筒 Otezutsu



手筒とは鉄砲のことで、殿様（藩主）や藩の鉄砲を備える者。大名行列では青みを帯びた深紅色の毛織物の鉄砲袋に入れて運びました。

両掛挟箱 Ryougakehasambako



鉄砲の雨覆入などを収納した両掛挟箱を担ぐ者。雨が降った場合でも発砲できるように一緒に持ち運びました。



道中ひと休み瓦版
藩主自らが
名刀で試し斬り?!

其の11

姫路藩の国替え（領地の移し替え）を描いた映画「引越し大名！」で知られる（つなたか）が参勤交代の道中、姫路に立ち寄った際のこと。二人は姫路城の綱隆が一言、「これは自分で試斬したけど、いい刀だよ。試斬とは罪人の死体名刀かどうかは、実際に人を斬ってはじめて証明されたものだったのでしょう。

藩主・松平直矩（なおのり）ですが、背筋が凍るような逸話も残っています。義兄の松江藩主・松平綱隆北側にある八代御茶屋で対面し、綱隆は自分が差していた青江守次という名刀を直矩に贈りました。その際、などを実際に斬って刀の切れ味を試すことで、直矩も家臣に試斬を命じ、その様子を見ていたとか。本物の



実はスゴイぞ、姫路藩！ 大名行列からもわかる、その格式高さの証とは。

今では世界遺産・姫路城を誇る地として広く知られる姫路。江戸時代においてもその名は格式高く、とても魅力的な藩でありました。そもそも藩の成立は1600年、池田輝政(てるまさ)がこの地を治めたことから始まります。輝政の後妻が徳川家康の愛娘・督姫(とくひめ)であり、幕府から絶大な信頼を得る由緒ある藩の一つでした。

その後、酒井家時代においてもその関係性は変わらず、酒井家の殿様(藩主)がしばしば幕府の最高職である老中や大老を務めるなど、幕政においても大きな存在感を示していました。その証として、大名行列においても他の藩には許されていない隊列や武器・道具などがあります。このページでは、そのような姫路藩の格式の高さを示す隊列や武器・道具などを紹介。知れば知るほど奥深い、大名行列の世界へ。ぜひ、姫路藩のスゴさに触れてみてください。

これぞ、大名の格付けランキング！

大名の格式は、江戸城本丸御殿に勤める時の控える間によって主に定められていました。徳川将軍に近い場所に由緒ある大名・家柄が、その近くを代々の将軍によって選ばれた大名たちが控えました。

菊之間 城を持たない諸衆並	雁之間 城主や城主格などの諸衆	柳之間 従五位以下の外様大名など	帝鑑之間 古来よりの譜代大名など	大広間 四品以上の国持・准国持の外様大名、越前松平家や御三家の分家など	溜之間 譜代の最高の座	大廊下 御三家と嫡子	将軍
36家	48家	73家	68家	28家	4家	6家	

姫路藩主・酒井家は帝鑑之間を基本に、溜之間にも控えるなど、代々高い家格を誇ってきました。

スゴイ証・其の一

武功の証しである朱柄槍を、 大名行列で備えていた！

柄が赤(朱)色で塗られた朱柄槍は武功の証しであり、1575年(天正3年)の諏訪原城攻めの戦功として酒井正親(まさちか)が「朱長柄」100本を徳川家康からいただいたといわれています。この朱柄槍を持てるのは、一説には大名家ではほかに2家に限られていたそうです。

スゴイ証・其の二

馬の買い付けは、 徳川将軍家の次の番だった！

馬の産地である南部藩(現・岩手県中部から青森県東部)や仙台藩(現・岩手県南部、宮城県全域など)から、良馬が江戸にひかれてきました。そこから徳川将軍家が最初に馬を品定めし、良馬を入手しました。その次に馬を選べたのが酒井家で、良馬を何頭も持っていたそうです。

スゴイ証・其の三

姫路に帰る際、 徳川将軍から鷹をいただいた！

数多い大名家の中でも限られた家だけが鷹をいただくことができ、とても栄誉なことでした。鷹は大名行列に遅れて姫路に届けられ、家臣たちの見守る中、姫路城の三の丸本城の玄関から虎の間を通り、鶴の間へと、大切なお客様を招くように迎えられました。

スゴイ証・其の四

御召馬の鞍覆は、 武威の象徴である 虎皮の鞍覆だった！

大名行列で率いる馬の鞍覆も大名の家格を示す重要な物の一つでした。特に、鞍覆を掛けられる家で虎皮が使えたのは徳川御三家や徳川将軍家一門である松平の各家や国持大名のみでしたが、酒井家は特別に虎皮の使用を認められていました。

スゴイ証・其の五

大名行列では、 「金紋」がついた 挟箱を使っていた！

駕籠の前や後に配置される挟箱を「先箱」「跡箱」といい、大名行列を象徴する持物の一つでした。箱の覆いや箱につける家紋などを美しく飾っていましたが、特に金紋は自由につけることができず、家格の高い家のみが徳川幕府より使用を許されていました。

5 本陣 Honjin

駕籠に乗った殿様（藩主）を中心に、周りには殿様を守る中小姓と呼ばれる武士や殿様の身の回りの世話をする者、側近たちなどがいました。大名行列の核であり、殿様を囲む隊列のことです。



御腰物筒
Okoshimonozutsu



御小姓供番
Okosyoutomoban



鉄砲
Teppon



両掛挟箱
Ryougakehasambako



腰物とは刀のことで、筒状の容器に入れて運びました。筒の持ち手が銀色の金具で、金色の家紋が描かれているため、殿様（藩主）の刀が入っていたとされます。

小姓とは武士の職名のひとつであり、殿様（藩主）の側に仕え、身の回りの雑務を担う者。また、殿様の警護なども務めました。

鉄砲を備える者。大名行列では青みを帯びた深紅色の毛織物の鉄砲袋に入れて運びました。

衣類や具足、文書などを挟箱という容器に入れて運びました。両掛けの挟箱で、殿様（藩主）または藩士の物が入っていました。

弓立
Yudachi



御用物長持
Goyoumononagamochi



対挟箱
Tsuihasambako



小馬印
Koumajirushi



弓2本と矢籠、弦巻と一緒にしたものを弓立または弓台と言い、それを担ぐ者。主に殿様（藩主）の持弓を運びました。

長持とは長方形の大きな箱のことで、殿様（藩主）の甲冑や刀、旗などの大切な物品が収納されていました。酒井家では朱塗りの武具運杵と金の家紋が描かれていました。

衣類や具足、文書などを挟箱という容器に入れて運びました。対挟箱とは片掛けの挟箱を1対としたもので、棒の先に紫の太い組紐の化粧紐を結びました。

殿様（藩主）や武将などの所在を示す馬印を備える者。酒井家が掲げた物は、徳川家康が本能寺の変で窮地に陥り、船で伊勢白子から知多半島に逃れる際に使用した船印だったとされます。

黒毛槍
Kurogeyari



白毛槍
Shirogeyari



長刀
Naginata



御小姓
Okosyou



長柄の槍の冠頭を、黒い鳥毛で飾った槍を備える者。大名行列をより目立たせるためにいました。

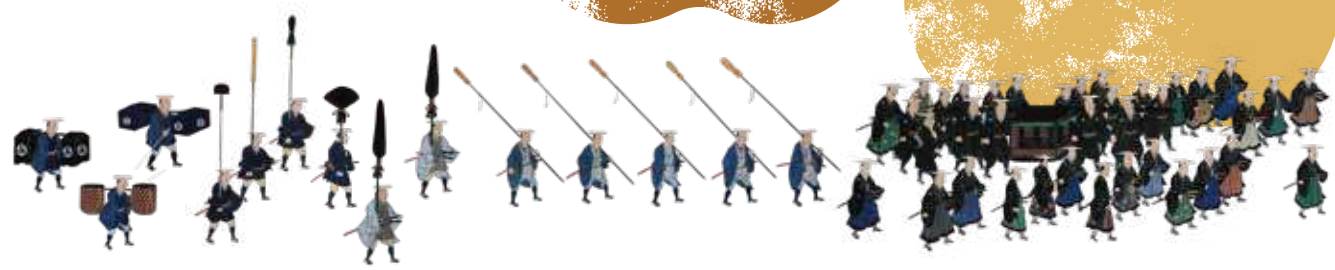
長柄の槍の冠頭を、白熊の毛で飾った槍を備える者。大名行列をより目立たせるためにいました。

武家のシンボルである長刀を備える者。大名行列では刃先を見せず、革製の覆いで隠しました。三日月形の覆いは酒井家であることを示していました。

小姓とは武士の職名のひとつで、殿様（藩主）の側に仕え、身の回りの雑務を担う者。また、殿様の警護なども務めました。

5 本陣 Honjin

駕籠に乗った殿様（藩主）を中心に、周りには殿様を守る中小姓と呼ばれる武士や殿様の身の回りの世話をする者、側近たちなどがいました。大名行列の核であり、殿様を囲む隊列のことです。



御供番 Otomoban



供番とは武士の職名のひとつで、殿様（藩主）の外出に伴ってその側に仕え、身の回りの雑務を担う者。また、殿様の警護なども務めました。

殿様（藩主） Tonosama / Hansyu



本陣の中心に位置し、殿様（藩主）は駕籠に乗って移動しました。衣装は明治時代に描かれた酒井忠績（ただしげ）の肖像写真などを参考に制作しました。

駕籠舁 Kagokaki



人足と呼ばれる日雇いの労働者が駕籠を担ぎ、その者を陸尺（ろくしゃく）と言いました。陸尺は、美男で体格のよい者が選ばれ、賃金も他の人足に比べて高かったそうです。

御手槍 Oteyari



刃先を黄羅紗という毛織物の鞘で覆った槍を備える者。駕籠の前に立て、殿様（藩主）の所在を伝えるとともに家格を示し、酒井家は家格の高い2本槍を用いました。

長柄傘 Nagaegasa



身分の高い行列では畳み、覆いがかけられていました。酒井家に差し掛ける傘を備える者。大名に差し掛ける傘を備える者。大名み、覆いがかけられていました。酒井家に差し掛ける傘を用いました。

台笠 Daigasa



身分の高い人が外出する際に飾り笠として用いた台笠を備える者。長柄の先には黒のビロードなどでできた袋に入れた被り笠をつけていました。

供槍 Tomoyari



殿様（藩主）の行列にお供する武士が自分の存在を誇示するための槍を掲げる者。穂先を覆う鞘の形は武士により多種多様であり、個性的なものが多かったといえます。

両掛挟箱 Ryougakehasambako



衣類や具足、文書などを挟箱という容器に入れて運びました。両掛けの挟箱で、殿様（藩主）または藩士の物が入っていました。

合羽籠 Kappakago



合羽を収納した籠を持つ者。合羽はもともとマント状の上着で、防寒用の服として使われていました。

坊主 Bouzu



殿様（藩主）にお茶を点て、また茶道具の管理をする者。剃髪していたため坊主と呼ばれていますが、僧ではなく武士階級に属していました。

茶弁当箱 Chabentoubako



茶弁当箱とは殿様（藩主）の外出用の飲食物運搬用具で、両掛にして運ばれました。茶弁当箱を持つていくには、徳川幕府からの許可が必要でした。

6 輜重隊 Shicyoutai

大名行列に必要な物資を運ぶ輸送部隊で、長持や挟箱などと呼ばれる容器に収納し、担ぎ手あるいは荷馬に乗せて運びました。殿様(藩主)の生活がまるごと移動するため、その量は大量だったそうです。



長持 Nagamochi



長持とは衣装や日用品などを入れる蓋つきの箱で、人足や中間と呼ばれる日雇いの労働者が担ぎました。日除けや埃などを避けるため、油をしみ込ませた家紋入りの布を掛けていました。

使番 Tsukaiban



藩に仕える者の役職のひとつで、大名行列の全体の巡視や、連絡が必要な時の伝令役を担いました。

使番御足輕 Tsukaibanoashigaru



使番のもとで働く足輕。殿様(藩主)の命令を周りに伝え、客人の対応をするなど、幅広い業務を行う使番の側で補助役を担いました。

口付 Kuchitsuki



口付とは馬をひき、馬の世話をする者のこと。御召馬の鞍に掛けられた虎皮鞍覆は、家格の高い大名しか使用が許されませんでした。

沓籠 Kutsukago



長距離移動の際、馬の蹄がすり減るため草鞋を履かせていました。その草鞋を沓と表し、付け替え用の沓を籠に入れ、ともに移動していました。

両掛鉄箱 Ryougakehasambako



衣類のほかに理髪や洗面などに使用する物を挟箱という容器に入れて運びました。両掛けの挟箱で、殿様(藩主)または藩士の物が入っていました。

道中ひと休み瓦版
参勤交代中に
ヘッドハンティング?!

其の三

数日間に渡り、移動を行う大名行列。道中での殿様(藩主)の休憩や宿泊には、各していました。本陣は徳川幕府より宿場の有力者が指定され、姫路城下の本陣交代の道中、姫路の本陣に宿泊しました。その際、本陣での仕事ぶりが認め本陣は、まさに出世街道にも通じていたのかもしれない。

宿場に一軒はあった本陣と呼ばれる宿が使われ、お供をする藩士や一般庶民は木賃宿や旅籠屋などに宿泊は代々、国府寺家が経営していました。ある年、伊予吉田藩(現・愛媛県宇和島市)の殿様・伊達氏が参勤られたのか、国府寺氏はスカウトされ、殿様に仕えるようになったといいます。殿様とお近づきになれる



意外な事実が見えてくる！ 姫路大名行列にまつわる数字を徹底追究。

姫路に伝わる大名行列の気になる数字を取り上げ、そこに秘められた衝撃の内容を紹介します。
現代ではなかなか信じられない、意外な事実が見えてくる。
数字から読み解く、姫路の大名行列の世界へ、嘘か、誠かは当時の藩士しかわからないかもしれません。

姫路藩の参勤交代で要した 行列の人数

前後2m間隔で並ぶとしたら
約 **450** 人 ← 約900m →

1741年(寛保元年)9月20日、姫路3代藩主・榊原政岑(まさみね)の参勤交代では、450人余りの人数が大名行列をなしたと記録されています。
20万石以上の領地を持つ大大名が率いる人数は385～450人であり、姫路藩の参勤交代の規模の大きさを知ることができます。

姫路～江戸間の距離・行列の速度

約 **640** km・約 **34** km/日

参勤交代では、一般的に姫路を出発し京都・伏見へ、東海道を通り関ヶ原を経由するコースが考えられます。出発の約半年前から藩の担当者がルートや宿泊日程表などを作成していたそうです。また、歩行速度を時速4キロの場合、一日8時間ほど歩いていたことに。重い行列道具を持ちながら歩きつづけるとなると、なんとも骨の折れる旅路だったことでしょう。



大名行列の場合

時速 **4km** 走行距離目安(8時間) **32km/日**



一般的な自転車の場合

時速 **11～14km** 走行距離目安(8時間) **88～112km/日**



自動車の場合

(一般道路)走行距離目安 **250km/日**

(高速道路)走行距離目安 **500km/日**

酒気帯び行列?! 酒井家の陸尺が飲んだ酒の量

8 合(約1.44ℓ)

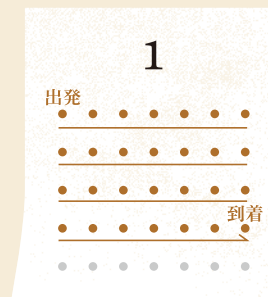
殿様(藩主)や藩士を乗せた駕籠を担ぐ者を陸尺(ろくしゃく)といい、酒井家の大名行列の際に立ち寄った三河・二川宿本陣(現・愛知県豊橋市)で酒をねだったといいます。その際、提供された酒量は8合だったとか。当時、陸尺たちは一杯飲んでから担ぐのが普通だったそうで、飲まないといけないほどつらかったのかもしれない。



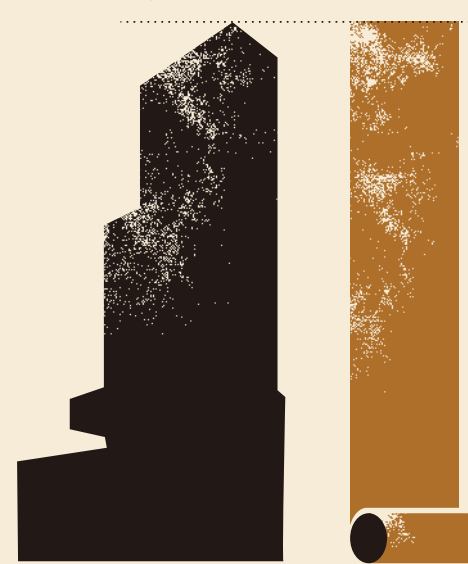
越すに越されぬ・・・姫路～江戸間にかかった日数

27 泊 **28** 日

大名行列を特に困らされたのが川越えでした。領土の防衛のため橋が掛かっていることはほとんどなく、人足と呼ばれる日雇い労働者が殿様(藩主)や藩士などを担いで渡ったといいます。そのため、増水時などは川留めに逢い、平均18泊19日のところ10日も余計にかかったこともありました。



約**300m**(高層ビル60階分)



あべのハルカス

高砂染の反物

徳川幕府への献上品である 反物の長さ

約 **300** m
(30反)

姫路藩主・酒井家は、参勤で江戸を訪れた際、徳川幕府へ姫路藩の特産品である高砂染の染物を献上していました。高砂染とは兵庫県高砂市の、長寿や縁結びなどの象徴である相生の松をモチーフに、翁や老婆、松葉などが描かれた吉祥文様を型染めする染め物で、その数量は30反にものぼったといいます。全てつなげると約300mもの長さになります。